

○名雪 充美 千羽 喜代子

(大妻女大・院, 大妻女大)

目的：身体的接触は、母子相互作用パターンの1つにあげられており、しかも乳児期においては主要な保育行動である。川上（1989）は、身体的接触の出現は乳児の月齢が高くなるにつれて減少し、接触パターンは直接的から間接的へと変化すると報告している。しかし、その身体的接触の具体的様相は明らかにされていない。そこで本研究では、身体的接触を保育行動としてとらえ、その意味を検討した。

方法：家庭で保育している母子2組の相互のやりとりを、乳児2名を対象に6か月～14か月にわたって、1回90分間各9回、ビデオに録画し、

- ①母親と乳児がそれぞれ行った身体的接触を動作別、接触行動別に分類する、
- ②ビデオ観察直後、その映像を見ながら、身体的接触のさいの母親の意図を聴取し、かつそれを乳児がどのように受け止めているのかを分析した。

結果：①身体的接触を動作別、接触行動別に分類すると、その種類は、母子により多少の違いがみられるが、「支える」「つかむ」「触れる」等に共通性が認められ、②そのさいの意図は、手段としてのもの（技能面）と愛情の表現としてのもの（情動面）に大別される。一般に、身体的接触を通して母子間の情緒の結びつきを強めると、情動面が強調されているが、本研究では手段としての身体的接触がかなりを占めていた。